



女学校の創設と明治国家：下田歌子と津田梅子の比較を中心として

著者	孫 東芳
雑誌名	文化交渉：Journal of the Graduate School of East Asian Cultures：東アジア文化研究科院生論集
巻	7
ページ	217-232
発行年	2017-11-30
その他のタイトル	The Meiji Government and the Establishment of Women's Schools A Comparison of Shimoda Utako and Tsuda Umeko
URL	http://hdl.handle.net/10112/11539

女学校の創設と明治国家

— 下田歌子と津田梅子の比較を中心として —

孫 東 芳

The Meiji Government and the Establishment of Women's Schools A Comparison of Shimoda Utako and Tsuda Umeko

SUN Dongfang

Abstract :

Shimoda Utako (1852-1936) and Tsuda Umeko (1864-1929) were pioneers and important representatives of Japanese women's education in the Meiji and Taisho eras. Both women were engaged in numerous educational activities, including writing and teaching. However both differed greatly in their styles. Shimoda Utako and Tsuda Umeko established 'Jissen Girls' School' (now Jissen Women's University) and 'Joshi Eigaku Juku' (now Tsuda University) respectively. Based on these two schools' educational principles and their process of establishment, this dissertation will compare the educational policies put forth by the Meiji government with the changes of thinking relating to social education, in order to investigate the relationship between women's education and the Meiji government. Namely, it will assess the degree of participation and the impact of the Meiji government on these two female educators' development and their educational causes. The relationship between these two female educators and the Meiji state shall also be analyzed. This dissertation will focus on the early period of the establishment of schools (the late 19th century), when female educators generally complied with the needs of the Meiji state.

Keywords : 下田歌子、津田梅子、明治、女子教育

はじめに

下田歌子と津田梅子は、日本の明治から大正期にかけて活躍した教育者であるということは周知のことである。明治時代、一般には女子教育や女子の社会的地位などほとんど問題にされなかったときに、二人はいち早く女性の地位向上を目指し、それにふさわしい女子教育があることを見抜き、実践した。そして、それぞれ自らの理念にもとづき学校や塾を創設した。本稿は二人が創立した実践女学校と女子英学塾の創立過程を取り上げ、両者の女学校の創立と明治政府の間でどのような関係があるのかを明らかにしたい。言い換えれば、実践女学校と女子英学塾の創設者下田歌子と津田梅子、二人の女教育者は、明治政府との間でどのような「距離」を置くのか、両学校に現れる女子教育方針はどちらが当時の主流になるのかということを考察したい。

第1節 明治政府の教育方針の変遷

明治政府は文明開化政策の方針に沿って、女子の就学を奨励し、教育令を施行した。1872（明治5）年に文部省は学制（「太政官布告第二一四号」）を發布した。この文章の中において、女子教育に触れているのは、次の三点である。

- (1) 従来、学校の設ありてより年を歴ること久しといへども、或は其道を得ざるよりして人其方向を誤り、学問は士人以上の事とし、農工商及婦女子に至っては之を度外におき、学問の何物たるを弁せず…
- (2) 自今以後、一般の人民（華士族農工商及婦女子）、必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す。
- (3) 高上の学に至ては、其人の材能に任かすといへども、幼童の子弟は、男女の別なく、小学に従事せしめざるものは、其父兄の越度たるべき事。

これを見る限り、もちろん単に女子だけについて論じたものではなく、武士を含む一般人に対する学校教育の重要性を強調したものである。その中で、注目すべき点は、「華士族農工商及婦女子ニ至ルマテ」就学すべきであるとしていることである¹⁾。特に「婦女子」と書き「男女の別なく」を加えていることに注目しなければならない。学制の本文に依れば、この時期に女子も国家による教育の正式な対象とされていたことが分かる。学制の制定者たちは、女子教育

1) 飯野正子、亀田帛子、高橋裕子『津田梅子を支えた人びと』津田塾大学、2000年、9頁。

に特別な関心を示していたのではないかともしはつきり見て取れる。ここでもう一つ注意しなければならないのは、学制公布する直前の1871（明治4）年12月は、ちょうど梅子及び他の女子四人が欧米視察の岩倉使節団一行とともにアメリカへ出発した時期であった。それも明治政府が国の教育のため全般的に手を打ったものではないか。

後に日本の婦人解放運動に影響を与えたJ.S.ミル（John Stuart Mill）の『婦人の隷属』がイギリスで出版されたのが1869（明治2）年、イプセンの『人形の家』は1878（明治11）年、ベーベル（August Bebel）の『婦人と社会主義』は1879（明治12）年次々と出版されており、欧米では女性解放の動きが胎動しつつあった。明治初期の日本においては、『明六雑誌』に森有礼（1847年—1889年）が「妻妾論」を掲載して妻となり、母となるために女子の軽視を問い直し、また中村正直（1832年—1891年）が善良なる母をつくるために男子婦人同様の修養を提唱している段階であった。学制期においては、女子教育のための明確な規定はなく、尋常小学教科のほかに女子の技芸を教える女兒小学がみられるのみである。

学制の発布によって日本国国民教育が始められたが、構想が大きかっただけに、その実施は大きな困難に当面した。学制実施の最重点とされた小学校は、1875（明治8）年には2万4303校となり、入学生徒数は192万6126人に及ぶという目を見張るほどの発展を遂げたのであるが²⁾、その裏には指導者側の強引な推し進めがあった。しかし、その反面強引さをもってしても種々な困難があった。その困難の一つは、女子の就学率の低さということであった。女子の就学率は、文部省年報が示しているように、明治10年になっても、わずか22.5%に過ぎず、男子の就学率の半分も及ばなかった。明治6年から明治15年の男女就学率は、下表の通りで、男子に比べて女子の就学率は極めて低かった。

表 明治6年から明治15年の男女就学率

年次	男	女	平均
明治6	39.9	15.1	28.1
7	46.2	17.2	32.3
8	50.5	18.6	35.2
9	54.2	21.0	38.3
10	56.0	22.5	39.9
11	57.6	23.5	41.3
12	58.2	22.6	41.2
13	58.7	21.6	41.1
14	60.0	24.7	43.0
15	64.7	31.0	48.5

（片山清一『近代日本の女子教育』建白社・1984年、8—9頁）

2) 片山清一『近代日本の女子教育』建白社、1984年、8頁。

この原因は、以下のものが挙げられよう。1つ目は、政府の意図したものと全く正反対に、一般民衆の父兄は「女子には学問不用」という考え方がひろく広がっていたこと。2つ目には、女子には子どもの頃から家事手伝いによって、女子としての教養が身につけられると考えられていたこと。そして3つ目には、新しい学制による小学校の教育は、実生活に役立たないと受け止められていたことなどであろう³⁾。

従って、女子にも男子と同等に教育を行おうとする学制の意図とは反対に、女子には、女子特有の教育が必要であると考えられるようになった。そして、学制改革を計画するに当たって、1879（明治12）年9月29日に、「太政官布告第四十号」をもって教育令が公布された。この際には、女子教育についての考え方を探るため、小学校の教科と男女別学の二点を取り上げた。小学校教科を示す第三条の末文に「殊ニ女子ノ為ニハ裁縫等ノ科ヲ設クベシ」と訂正した理由については次のように記している。

該地方要用ノ科ヲ設クルモ妨ナシ」ト云ハバ、各地各別ノ要用ヲ言フモノノ如クニシテ而シテ要用ノ科ヲ設クベキハ、独り女子に止ラズ、男子モ亦同一ナラザルヲ得ズ。但男女ノ殊別ハ唯裁縫等ノ科目ニアリ。且「妨ナシ」ノ字ハ禁ヲ弛ムルガ如キノ意アリ、故ニ之ヲ修正ス⁴⁾。

これをみると、女子教育は、男子教育と異なるべきものがあることを明確に打ち出したものと考えることができる。

以上を見てみると、教育令において、すでに男女は別途に分けて教育すべきことと男女は、それぞれに異なった内容のことを教えること、その二つが決定的なポイントとして打ち出されたわけである。なおこの時期から女学校は少しずつではあるが、設立され始めていた。

一方、近代日本教育制度では、女学校の設置が人材教育の基本であり、不可欠なことであるといえる。女子に対して学校教育を行うことを法で定めたのも、日本最初の近代的学校制度を定めた教育法令—学制である。しかし日本における最初の女学校の設立は宣教師によるものであった。1870（明治3）年にメアリー・E・キダー（Mary E.Kidder）⁵⁾が、横浜のヘボン施療所で女子教育を開始した。これは、後に1876（明治9）年にフェリス女学校となる。そのような中、1871（明治4）年12月に、山川捨松（1860年—1919年）、津田梅子らが最初の女子留学生として米国に出発している。1875（明治8）年にお茶の水女子大学の前身である東京女子師範学校が、翌年には初の私立女学校である跡見女学校が開校となった。以後、同志社女学校、梅花女学校、女子師範学校が設立され、女子教育の進歩を見ることができる。

3) 前掲片山1984年、26頁。

4) 前掲片山1984年、13頁。

5) Mary E.Kidder：米国宣教師。

ちょうどこの頃から、日本社会に根づいた種々の女子教育論が登場するようになった。以前の女子教育論は、江戸時代の身分制度、性別制度のもとに作られた「女実語教」⁶⁾に代表される儒教的、封建的なものと、自由民権運動を背景とした西欧の女性論の翻訳もの、啓蒙思想に基づく女子教育論のものがあったが、弾むような文化開明主義が漲っていたが、そのどちらも新しい社会へ根づく力をもっていなかったようである。

このような欧米の文化、文明を吸収した結果、人々の中には西洋かぶれの下に、屁理屈を述べて孝を忘れ、長幼の序を転倒になる社会に増えた不満となっただけでなく、伝統的な儒教的道徳の教育を懐かしむものも多くなったようである。そのような状況の中で伊勢田氏は以下のように述べる。

天皇はこうした事情を憂慮され、ついに「教学聖旨」を公布した。それは学制発布以来の教育が知識才芸に偏って、我が国の伝統である仁義忠孝の徳育をないがしろにしていることを批判したものである。それに、「教育議府議」を提出され、つまり「道徳こそ教育の基であり、天皇こそこれを定めるに相応しい聖賢である」と元田永孚⁷⁾（1818年—1891年）はそう言った。⁸⁾

このように、明治初期以来の文化開明主義の教育政策の転機が訪れたことは、文化開化主義対伝統主義、知・技優先主義対道徳優先主義の論争でもあった。明六社⁹⁾の一員として欧米文化にも通じていた西村茂樹¹⁰⁾（1828年—1902年）でさえも、昔ながらの儒教道徳への回帰ではないものの、日本型徳育を創出し、これを重視する立場をとるようになる。その結果、欧米の文明、文物摂取への情熱は、とくに民衆レベルにおいて後退し始めるのである¹¹⁾。

1885（明治18）年、内閣制度の誕生とともに内閣総理大臣伊藤博文¹²⁾（1841年—1909年）が誕生し、初代文相となった森有礼（1847年—1889年）は、翌年から諸学校の整理と組織化に専念し、学校令を中心とした教育法令の制定によって、教育制度の整備を図った。即ち、「帝国大学令」、「中学校令」、「師範学校令」、「小学校令」諸学校令を相次いで公布した。「帝国大学

6) 女実語教：平安時代末期から明治初期にかけて普及していた初等修身書、児童教訓書として使用された。

7) 元田永孚：熊本藩の藩校、時習館で講じている儒学者である。天皇の漢学の師となっていた。

8) 前掲伊勢田2000年、13頁。

9) 明六社：明治初期の啓蒙思想団体。1873（明治6）年森有礼の発起により、翌年、西村茂樹・西周・加藤弘之・福沢諭吉らを主要社員として成立。機関誌「明六雑誌」と公開講演によって欧米思想の紹介、普及に努めた。75年の機関誌廃刊により事実上解散。大辞林 第三版の解説。

10) 西村茂樹：明治時代の日本の啓蒙思想家、教育者である。

11) 森有礼『文部大臣森子爵之教育意見』日下部三之介出版社、1958年、118頁。

12) 伊藤博文：政治家。山口県生。本姓は林、幼名は利助、のち俊輔、博文は諱、号に春猷・滄浪閣主人。初め松下村塾に学び、木戸孝允に従い尊王攘夷運動に参加。最初の内閣総理大臣・枢密院議長・韓国統監等を歴任。詩文及び書を能くした。明治42年（1909）ハルビンで客死、69才。

令」に於いては、「国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其藏奥ヲ致究スルヲ以テ目的トス」と規定し、国家の「上流ニ立ツヘキ人物」「學術精練ノ士ヲ養成スル」¹³⁾ことが宣言されている。ここでは、大学が国家のために存在するのみではなく、すべての学校が国家主義の色彩を基調とするものへの改定であったというのは、当時の為政者たちが国内外の状況を見たから制定したといえる。

ところが、1879（明治12）年「教学大旨」、1880（明治13）年「改正教育令」、1881（明治14）年「小学校教則綱領」と、相次いで出された開化啓蒙の学制期に対する方向転換は、同じく1881（明治14）年に「小学校教員心得」が出された。これは最終的に1885（明治19）年の「学校令」に連なり、1889（明治23）年「教育勅語」となって完結するのである。

もう一つ注意しなければならないことは森有礼文部大臣が国家主義的政策を打ち出した1887（明治20）年頃からキリスト教による教育に批判的な風潮が生まれていることであろう。例えば福沢諭吉¹⁴⁾（1835年—1901年）も「耶蘇会女学校の教育」において一般家事の教育の欠落という点から強く批判している。

このため、1880年代末からのナショナリズムの台頭と日本としての教育の独自性が強調されるにしたがって、それまでキリスト教系に多くを依存していた女子教育にも変化が求められる。さらに追い打ちをかけるように1891（明治24）年の内村鑑三¹⁵⁾（1861年—1930年）の「不敬事件」にはじまり、井上哲次郎（1856年—1944年）を代表とする国家主義思想によって「教育と宗教の衝突」問題がおきる¹⁶⁾。これらによってキリスト教そのものが批判された結果、女子教育においては良妻賢母を基調とした教育が重視されるようになった。しかし、良妻賢母思想が重視された一方で、その動きは決して洋学拒否という意味ではなかった。むしろ政府が広く知識の世界で日本に相応しい教育を求めようと考えていたらしい。

梅子が山川捨松とともに当初の予定を一年延期して11年間の留学を終え、1882年一月に帰国した当時、日本の教育はこのような状況であった。

第2節 下田歌子による実践女学校の創設

1871（明治4）年、明治天皇は四民平等になった国民に広く学問を進め、それを奨励する「勸学の勅諭」を發布した。これに基づき、三年後の1874年に華族の生徒のために「華族勉学所」が設けられ、明治10年には「学習院」¹⁷⁾と名を改めた。前章で述べたように、学制のため、女子

13) 前掲片山1984、20頁。

14) 福沢諭吉：日本の武士、蘭学者、著述家、啓蒙思想家、教育者。慶應義塾の創設者である。

15) 内村鑑三：日本のキリスト教思想家・文学者・伝道者・聖書学者。福音主義信仰と時事社会批判に基づき日本独自のいわゆる無教会主義を唱えた。「代表的日本人」の著者でもある。

16) キリスト教学校教育同盟『日本におけるキリスト教学校教育の現状』1961年、69—72頁。

17) 旧宮内省の外局として設置された官立学校。1885（明治18）年四谷区尾張町に華族女学校を設置する。

の入学は認められていたが、それは形だけであり、男子に重きを置く傾向が明白だった。たとえ女子が入学できても、小学科止まりであり、中学科まで進める男子とは差があったため女子就学率も低かった。

「男尊女卑があまりにも露骨だ」、「これでは西欧諸国から野蛮国とみなされても仕方なからう」¹⁸⁾と政府高官の焦りはつのるばかりであると共に、真の女子教育を目指す必要があった。この時期は、政府のもたつきと対照的に、私立の女学校は続々と誕生した。そのほとんどがキリスト教の学校である。いち早く明治三年横浜のヘボン治療院でミス・キダーが女子教育を始めた。これは英語塾の元祖であり、1876（明治9）年にフェリス女学校の全身となる。1871（明治4）年にはアメリカン・ミッション・ホーム（現横浜共立学園）、1875（明治8）年に京都出身の跡見花陰による跡見女学校（現跡見学園）、神戸英和女学校（現神戸女学院）、1876（明治9）年に京都に同志社女子塾（現同志社女子大）などが誕生した。この中では跡見女学校だけが珍しくキリスト教を主としない日本人が創設した学校であった。キリスト教の学校にも関わらず、明治初期において、英語の必要性が痛感されること同時に、英語を教える学校が続々創立し、それがペリー来航がもたらした英語ブームというものだ。1873（明治6）年には、官立の英語学校のほかに、東京府内だけでなんと1130校もの私設も英語学校があったという¹⁹⁾。

それと同時に、明治政府にも大きな変化があった。1880（明治13）年12月、「改正教育令」が出された。それ以前の教育は西欧文明を取り入れることに躍起で、洋学を中心としていた。この頃から一変して儒教や国学を復活させる動きが政府内で起こり、加速したのである。文部大臣の福岡孝弟²⁰⁾（1835年—1919年）は「特に教育は公国固有の教えに基づき、儒教の主義によることを要す」²¹⁾と述べ、それまで使われていなかった論語や孟子の本を全国の学校で教科書として使用させた。仁義忠誠の道を明らかにし、道徳の方向では、孔子を範として人々はまず誠実な品行を尊ぶよう心がけねばならない。この方針には内務卿の伊藤博文が深く関わっていた。大急ぎで西欧文明を吸収せねばならないが、日本人としての心の奥には、儒教や国学をしっかり据えておかなければならないと考えた。新政府の高官である伊藤博文や井上毅（1844年—1895年）²²⁾、山県有朋（1838年—1922年）²³⁾、土方久元（1833年—1918年）²⁴⁾らは思い悩み、彼らにとって、日本国全体の問題であるだけでなく、一人ひとりの娘に何としても、新時代の一

18) 仲俊二郎『凜として近代日本女子教育者の先駆者下田歌子』栄光出版社、2015年、170頁。

19) 山本博文『ペリー来航 歴史を動かした男たち』小学館、2003年、195頁。

20) 福岡孝弟：日本の幕末から明治時代の土佐藩士、政治家。五箇条の御誓文を起草した人物である。

21) 福岡孝弟「実歴史伝（第三）福岡孝弟子」『太陽』第5巻第4号、博文館、1899年2月。

22) 井上毅：日本の武士、官僚、政治家である。子爵。法制局長官、文部大臣などを歴任する。

23) 山県有朋：日本の武士、陸軍軍人、政治家。階級位階勲等功級爵位は元帥陸軍大将従一位大勲位功一級公爵。内務大臣（初・第2・第3代）、内閣総理大臣（第3・9代）、元老、司法大臣（第7代）、枢密院議長（第5・9・11代）、陸軍第一軍司令官、貴族院議員、陸軍参謀総長（第5代）などを歴任する。

24) 土方久元：日本の武士（土佐藩士）、政治家である。

人前の女性として希望のある教育を受けさせたいと考えていた。というより、まさに直近の課題であった。

為政者たちが「女子教育が進まないのには理由がある。それは女子生徒を教える先生だ。先生はやはり女子でなければ、うまくいかぬぞ」²⁵⁾ と言い、その教師にふさわしいのは、今は退官している下田歌子以外にはいないのではないかと、誰も考えた。「あれほどの才覚のある女を知らぬわ。華胄界の若い娘たちに、国学や和歌を教えさせることにしたらどうかな」、「あの人なら適任じゃ。でも今は夫の看病に明け暮れていると聞く。果たして聞き入れてくれるかのう」、「本当に不幸な結婚をなされたものだ。家計の方も大変らしい」、「ならば、どうじゃろう。当面は彼女の家で吾輩らの娘に教えてもらうということなら、やってくれるかもしれぬ」²⁶⁾。そこで、井上毅が皆を代表して下田歌子を訪ねることに決まった。このように、当時の必要性に迫られるなか、歌子は「下田学校」と名付けた私立女学校（後の桃天学校）を創設（明治15年）した。生徒は政府高官の妻女をはじめとし、一時は200名を超えたようである。その中、上流家庭の子女のみならず伊藤博文夫人、山県有朋夫人、田中光顕夫人ら、多くの母親や令嬢が生徒となった。そんな関係で歌子は伊藤ら政界の重鎮との距離がいつそう近づくことになった。これが下田歌子による女子教育の始まりである。そしてその年1882（明治15）年6月、校名を「桃天女塾」と改めた。この「桃天」という名は、詩経の周南桃夭篇の中から取っている。「桃の夭夭たる 灼灼たるその華、この子ゆき帰ぐ 其の室家に宜しからん」²⁷⁾ という。

つまり、「桃の若木のみずみずしく、輝くその花はひときわ鮮やかに美しい、この子が他家に嫁げば、その家庭に似つかわしいだろう」²⁸⁾ という意味である。それによると、歌子はまさにふさわしい教養と品格を備えさせようという思いを注ぎ込んでいるのではないだろうか。

桃天女塾の時期で、伊藤博文ら為政者たちがよくここを通じて歌子との交際が高まるにつれ、ますます彼女の女子教育への熱意と抱負、さらに時勢に対する鋭い洞察力と、時流に見抜く眼力に感銘した。「下田教授は大臣になる器である」というのは伊藤がよく言った台詞であった。井上毅なども同じような感想を述べているようだ。「下田さんが男であったなら、大臣にしてみたい。生き馬の眼を抜くというのは、こういう女丈夫をいうのだ。」²⁹⁾

一つ注意しなければならないのは、下田歌子は塾を開始したこの時期には、ちょうど十年前五人の少女の一人として津田梅子はアメリカで11年ほど留学生活を送って日本に帰ってきたことである。彼女はほとんど日本語を忘れ、実際には何の仕事もないまま毎日退屈していた梅子が新しい局面を迎えていたのは、伊藤博文との再会がきっかけであるという。梅子は帰国して

25) 前掲仲俊2015年、172頁。

26) 前掲仲俊2015年、172頁。

27) 桃之夭夭，灼灼其華。之子于歸，宜其室家。『詩經・周南・桃夭』第六篇。

28) 前掲仲俊2015、175頁。

29) 前掲仲俊2015、15頁。

一年ほど経った1883（明治16）年の天長節のパーティーで11年ぶりに伊藤と再会を果たした。そのとき梅子は仕事がなく困っていることを伊藤に訴えたようだ。伊藤はとりあえず梅子を通訳兼家庭教師として自宅に住ませ、その後も何かと梅子の面倒をみて英語力を生かせるように計らってくれた。またこのパーティーに、伊藤の紹介で、梅子は当時の著名な夫人になった下田歌子と初めて出会った。ちょうど当時桃夭女塾に欠けていたのは梅子のような英語教師だった。それに歌子はすぐに伊藤を通して、梅子を教師にと要望した。梅子はこうして英語教師となる傍ら歌子から、日本語、習字、日本文化など習った。このように、梅子の教育者としての第一歩が桃夭女塾から始まったのだった。

そして、この二人の良好な協調関係は次の華族女学校でも引き継がれていくのである。明治の時代、多少、歳の差はあれども、女子教育界の先駆者となった二人が、こうして同じ場所で同じ時を過ごしたということは、実に感慨深いことではないだろうか。もし梅子がパーティーで伊藤博文に出会っていなかったら、そしてもし歌子に出会っていなかったら、後の梅子の進路は違ったものになったかもしれない。歴史は二人の偉大な先駆者を必要があって対面させたのである。何と粋な計らいであろうか。偶然といえば偶然だが、歴史の眼から見れば、必然と思わざるをえないのである。

昭憲皇后の推薦で1885（明治18）年9月16日、歌子は華族女学校幹事兼教授に任命され、同時に歌子の計らいで津田梅子も教授補となる。そして同年11月13日、ついに待望の華族女学校が四谷に開校した。開校時の生徒は、「学習院」女子部から移ってきた三十八名に、編入試験に受かった歌子の桃夭女塾の生徒六十名が合流し、さらに新規の入学志望者からも選抜して、計百四十三名でスタートした。因みにここでは、開校日、皇后は華族女学校に行啓された。資料によれば昭憲皇后はこの華族女学校を非常に愛し、近くの赤坂御所に住んでいた、頻繁に華族女学校を訪れ授業を参観し、心から華族女学校の発展を望んだという。

1893（明治26）年9月に、下田歌子は欧米先進国に女子教育の範を求め、皇女教育視察のために欧州に出発した。帰国後の歌子は、欧州をありのままに受け入れ模倣するのではなく、日本の生活や習慣を考慮し、徐々に変化をもたらすのが最善であるという考えに至った。

帰国後三年余り経った1899（明治32）年、帝国婦人協会を母体とする私立実践女学校ならびに女子工芸学校が創設され、下田歌子は初代校長に就任した。「本邦固有の女徳」を基礎とし、広く一般女子に対して実学と実践の教育を行うとの理念のもと、東京市麹町区元園町二丁目四番地に、実践女学校ならびに女子工芸学校が誕生したのであった。校舎は旧海軍予備校の校舎を修復して使用した。直ちに生徒募集を始め、入学試験を経て、五月七日、四十名の入学式が行われた。入学式には、実践女学校の修業年限は五ヶ年とし、規則の第1条には、「日進の学理を応用」し、「現今の社会に適応すべき実学」を教授すると書かれている。また「修身齊家必須なる実学を教授し、以て良妻賢母を養成する」のを目的とし、「処世に必須なる実学、技芸を教

授し、兼ねて自営の道をも講ぜしめる』³⁰⁾と規定した。このようにして歌子が唱えた一般女子とする実学実験の学校生活が始まったのだった。

第3節 津田梅子による女子英学塾の創設

前述のように、梅子は華族女学校で英語教師となって教育事業を始めた。翌年つまり1886(明治19)年11月には教授に任ぜられ、女性としては異例の年俸500円の給料を受ける身になった。しかし、女子にしっかりした英語力を、と真剣に考えていた梅子にとっては、勉学を身だしなみの一つとしてしか考えず本気で学ぶ気のない良家の子女は、真剣さに欠けていたのであった。そのような梅子に、華族女学校で英語を教えるために来日していたアリス・ベーコン(Alice Mabel Bacon)³¹⁾が再留学をすすめ、父仙につながる人々の厚意から梅子のプリンマー大学留学が実現した。

華族女学校在職のまま2年の留学許可を得て梅子が横浜を発ったのは、1889(明治22)年7月である。プリンマー大学では選科生として生物学を専攻した。留学2年目にはモーガン(Thomas Hunt Morgan)³²⁾教授と共同で蛙の卵の発生を研究し、学年の終わりには“The Orientation of the Frog’s Egg”と題する論文を発表した。

なお女子英学塾の創設と運営に当たっては、この第二の留学時代に築いた人脈によって、多大の経済的支援を受けることができた。

プリンマー大学から帰ってからも梅子は引き続き華族女学校で教え、教授となって八年間務めていた。1898(明治31)年には女子高等師範学校教授も兼ねた。その6月に梅子はアメリカのデンヴァーで開かれた万国婦人連合大会に日本女性代表として出席する機会を得た。時に梅子が34歳のときである。梅子は3千の聴衆を前にスピーチをした。それは、この大会に参列する機会を与えられたことへの感謝からはじまり、アメリカにおける婦人の活動や教育施設などを見学したいこと、日本は外交、通商だけでなくあらゆる面で他国と協調しなければならないこと等に触れてあり、非常に格調の高い堂々としたスピーチは、聴衆を大いに感動させたという。

30) 実践女子学園100年史編纂委員会編集、『実践女子学園100年史』実践女子学園、2001年、23頁。

31) アリス・ベーコンについては、Yasaka Takagi, “Bacon, Alice Mabel,” Edward T. James, et al. (eds.), *NotableCoraM.Folsom “The Dixie Hospital: In the Beginning” The Southern Workman March, 1926*, pp. 121—126; 高橋裕子「アリス・ベーコンと女子教育改革 人種・文化・国境の壁を越えて」『津田塾大学紀要』第二四号、一九九二年、93-106頁。大山捨松の家族背景や経歴については、久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初の女子留学生』中央公論社、1988年。また、津田英学塾『津田英学塾四十年史』1941年、も「故人の面影」として両者を紹介している。

32) Thomas Hunt Morgan: アメリカ合衆国の遺伝学者。

かくして、女性の教育および向上という仕事は、一つ国から他国へと伝えられてゆくであります。かくして女性は、世界のいずれの国においても、野蛮時代の隷属と酷使から解放され、さらに、おもちゃやお人形的な存在からも脱し、一步一步向上をつづけ、やがては男性の真の協力者にして対等の地位に立つ者となるであります³³⁾。

と最後に結んでいる。梅子の理想とするところが高々とあげられている。この大会のあと、梅子は招かれてイギリスに渡った。ヨーク大主教夫人の招待で暮れの数日を大主教邸で過ごしたとき、梅子は、自分のおかれている立場、現在の仕事、将来の希望などを打ち明け、力の足りないこと、信仰の弱いことを大主教に嘆いた。ともすればくずれそうになる自分にむち打ち励ましつつ、自分は進まなければならないという決意を持つ梅子の姿がここにはあるようだ。

アメリカやイギリスでつぶさに女性の働きを観察し、それに友人ヘレン・ケラー (Helen Adams Keller)³⁴⁾ やナイチンゲール (Florence Nightingale)³⁵⁾ といったすばらしい女性と語り合う機会をとおして、梅子の気持は、だんだんと固まっていた。

帰国後の梅子は改めて、日本における女性の地位の低さを目の当たりにした。維新後の日本は、男子の教育が目覚ましい発達を遂げているのに比べて、女子教育は遅れていることを梅子は実感したという。英語教授を務めた華族女学校における梅子は上流階級の気風や「女性の従順さ」を育成する教育理念、女子中等教育が普通教育に特化されていたことなどに対する不満も持っているようであった。それ以外に、女性にその試験に応ずるだけの準備をする学校がないことを残念に思っていた。当時女子の高等教育機関といえば、東京の女子高等師範学校一校しか存在しない。また当時、東京女高師には英文科がなかったなどという欠点があること、時代は既に女子の高等教育を求めているのではないだろうか、などということ思い巡らした。この思いがさらに進んでいくには、梅子はそのころすでに英語教員検定試験委員の一人に任命されていたが、自分の生涯の事業は、日本の女子高等教育開拓の分野にあるのではないかと考えるに至った。つまり、梅子は女性に高等教育と高度な教養を与え、広い視野、特に西洋思想の知識をもつ「良い教師」の育成をねらいとし、女子英学塾の創設を構想したのであった。

それに、梅子は私塾設立の計画をアナ・ハツホン (Anna C. Hartshorne)³⁶⁾ に打ち明けた。外人の設立したミッションスクール³⁷⁾ では英語は教えても、日本のことからの勉強が不十分に

33) 山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館、1962年、161頁。

34) 梅子は1894年8月に、ヘレン・ケラーを訪ねて、日本について話し合った。Helen Adams Keller: アメリカ合衆国の教育家、社会福祉活動家、著作家である。

35) 梅子は1894年3月に、フローレンス・ナイチンゲールを訪ねて、話し合った。Florence Nightingale: イギリスの看護師、社会起業家、統計学者、看護教育学者。

36) アナ・ハツホンは、アメリカプリンマー大学に留学していた津田梅子とキャンパスで出会って以来、梅子の片腕として塾の創設を多く支えた。「アナ・コープ・ハツホン—梅子と塾の娘たちのために捧げた一生」飯野正子、亀田帛子、高橋裕子『津田梅子を支えた人々』津田塾大学参照。

37) ミッションスクール: キリスト教に関係がある組織や関係の深い人物が設立した学校法人によって、

なりがちな欠点があるので、この際、どうしても日本人の手で英語を十分に教える学校を創立する必要があるというのが梅子の考えであった。また英語の勉強をとおして西欧のものの考え方を学ぶことが女性にとっても大切なことであると信じていた。梅子は英語教授に関しては自分の力に自信があった。生徒も集まると思った。ただ、こうした高等教育をどこからの支持も受けずに独力で支えてゆくのは困難であろうという経済的な不安があった。それでも土地と建物さえあれば、あとは何とかやっていけるのではないかと思った。梅子はこうした望みや不安のすべてをミス・ハツホンに打ち明けた³⁸⁾。そして、そのような時が訪れたら協力してほしいと願った。

1895（明治28）年4月、西園寺公望（1849年—1940年）³⁹⁾ 文相は高等師範学校の卒業において、続いて六月には全国師範学校長に対する講義において、極めて開明な演説を行った。西園寺は女子教育について「女子教育を奨励すべき、女子教育の如き失敗の先鞭あるを以って、世人再び之を口にす勇氣なきも、文明国にあつては女子教育必ず旺盛にして、女子教育旺盛なる国は文明国と言う実状なり。且つ吾人の相続者たる英児を保育するは一つに賢女の任たるを知らば、その失敗の先鞭あるに拘らず将来隆盛を期せざるべからず」⁴⁰⁾ という論調から明治初年の自由闊達さが戻ってきたように見える。

明治三十年代になると、良妻賢母主義の女子教育論が女子教育界において大きな比重を占めるようになった。1899（明治32）年2月9日勅令第31号をもって「高等女学校令」が公布せられたが、その教育の目標は「女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為ス」ことであるが、教育の目標としては明らかに良妻賢母の育成を目指すものであった⁴¹⁾。その後同年8月、東京女子高等師範学校嘱託の下田次郎はこのテーマの研究のために独・英・仏に留学を命じられ、三年間の研究の後に帰国して同校教授となったが、その教育論の中で、以下のように述べている。

女子教育の目的は婦徳を養ひ良妻賢母良姑及び女子に適當なる職業の準備を与へ、体育を重んじ知識芸能を授け、美的趣味を涵養し、立派に我が品位を保ちながら社交的ならしめ、以て自他の為に遺憾なく生活せしむるの準備を与ふるにある。……種々の事情で自分で生活を立て、行かねばならぬ婦人が益々多くなる。此等の婦人に対しては固より、生活する必要はないが仕事がなく困っている婦人も多いから、自分のため、又他人のために時間を有益に費やすの芸能を授ける必要がある⁴²⁾。

設置運営されている日本の大学の総称である。

38) 山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館、1962年、155-156頁。

39) 西園寺公望：日本の公家、政治家、教育者。

40) 前掲注1)、20頁。

41) 前掲片山1984年、115頁。

42) 前掲片山1984年、21-22頁。

要するに、良妻賢母とする要望が高まっている時期だけに、以前から高等女学校令による高等学校への要望も上がってきた。その中で、成瀬仁蔵（1858年—1919年）⁴³⁾ は代表的な人物である。彼は長い間、女学校経営の経験に基づき、「日本国民の母たる女性の教育」、「人として、婦人として、国民として」の女性の教育理念を主張した。こうした本格的な専門教育機関の設置や専門教育を行おうとする気運が盛り上がっていた。例えば、医院を開業していた吉岡彌生（1871年—1959年）⁴⁴⁾ は婦人問題に注目し、男子とは別学の女学校の設立を目指して活動を始めた。

こうした周囲の状況の変化の中で、ついに梅子は本格的な英語教員を養成する専門学校の創立を行った。1900（明治33）年3月に教員免許令⁴⁵⁾、6月に文部省令第10号「教員検定ニ関スル規程」という教員検定規程が制定された。それによると、高等女学校の卒業証明書があり、更に教員免許資格に関わる文部大臣の許可を受けた学校に入り、三年以上在学して卒業したものは文部大臣の適当とすると認められた学科に関する無試験検定によって免許を授与する、ということである⁴⁶⁾。しかし、それに該当する女子の英学教育の学校は全くない状況だったが、これを天職と考えている梅子は、早速、華族女学校教授と兼務の東京女子高等師範学校教授とを辞任した。当時の梅子はもう高等官五年俸800円という名実ともに恵まれた地位であり、十分名誉に満ちたものだったが、そういう行動をとったことは、大きな驚きであった以上に、彼女の抱負や決意はどれほど大きいものか端的に表した行為と言えるであろう。1900（明治33）年7月、彼女はいよいよ東京府知事宛に女子英学塾の設立の願を提出した。1899（明治32）年8月3日勅令第359号により私立学校令⁴⁷⁾ 公布によって、まもなく同月26日には、許可が下り、梅子は自ら塾長となり、父津田仙、アリス・ベーコン、大山捨松、伊藤博文、桜井彦一郎、鈴木歌子らの協力を得て、ようやく積年の理想を実現する活動の場を得たわけである。

1903（明治36）年3月勅令第61号をもって、「高等なる學術技芸を教授する学校」⁴⁸⁾ に対して専門学校令が公布され、女子英学塾は1904年その認可をうけた。また、無試験検定による英語教員免許状の授与権も1905年9月に与えられている。この免許状は、私立女子教育機関として1923（大正12）年に日本女子大学校にも認可されるまで、女子英学塾が独占していた。

43) 成瀬仁蔵：明治から大正のキリスト教宣教師であり、日本における女子高等教育の開拓者の1人であり、日本女子大学（日本女子大学校）の創設者として知られる。

44) 吉岡彌生：日本の教育者、医師。東京女医学校及び東京女子医学専門学校、また東京女子医科大学創立者。

45) 教員検定は、戦前文検による試験検定の他、無試験検定制度もあり、「指定学校」として帝国大学・高等学校・実業専門学校などの官立高等教育機関卒業者や、「許可学校」として文部大臣の許可を得た私立学校卒業者に、中等教員免許が与えられていた。

46) 飯野正子、亀田帛子、高橋裕子『津田梅子を支えた人々』津田塾大学、2000年、23頁。前掲注1）、23頁。

47) 長峰毅『学校法人と私立学校』日本評論社、1985年。

48) 海後宗臣（監修）『日本近代教育史事典』平凡社、1971年。

因みに、1900年から翌年にかけては予定通り、女子英学塾を最初に、東京女医学校、女子美術学校、日本女子大学が創立され、女子高等教育時代の幕明けとなり、以後、とくに1903年発令された専門学校令公布の後は、続々と各種の女子専門学校が設立されていく。その点から見れば、現実を見抜いて、先見の明のある梅子及び女子英学塾は当時の女子教育に良い手本になるようである。

第4節 小 結

全ての前節を合わせて見ると、下記のとおりいくつかの結論にまとめられる。

まず、漢学者の家に生まれた歌子と西欧文化を摂取した旧幕臣津田仙の娘としての梅子の運命はかなり普通の女子と違っていた。敢えていうならば、強力なバックアップに支えられていたといえよう。それは明治国家として文明開化がもたらした一つの結果ともいえる。伊藤博文や井上毅らの支持やサポートがなければ、二人の人生はかなり違う道を歩いていたであろう。ひいては教育事業における貢献もかなり違っていただろう。宮中の経験を持つ歌子は、昭憲皇后の恩恵に浴して、明治14（1881）年に桃夭女塾、明治18（1885）年華族女学校、明治32（1899）年年帝国婦人協会を母体として私立実践女学校ならびに女子工芸学校を創設した。一方、自己意識がない6歳の時既に、初の女子留学生としてアメリカに派遣され、帰国後の教育者としての一歩を踏み出し、そして女子英学塾創設などの努力を尽くした梅子の人生は、自分の努力は言うまでもなく、明治国家の為政者たちの日本の近代化、文明開化への熱い想いと密接に関係があったように考えられる。ここで一点強調したいのは、学制期には、十年もの期間、少女たちをアメリカに留学させることから考えれば、彼女たちの犠牲を覚悟とする実験のようにみられる。さらに、田中彰によれば、明治政府はこの少女たちが明治維新の敗者となった下級官吏の出身であったので、犠牲にすることを憚らず、国益のために未知の西欧を探る実験台として選ばれた「自身御供」であったという⁴⁹⁾。また、全体から見通れば、学制期の起草者たちは、もし学制が順調に実現されていれば、五人の女子留学生が帰国した時には、女子教育の分野で大いに躍らせようとも目論んでいたであろう。この点から考えれば、明治政府及び明治国家は二人の人生にどれほど大きな役割を果たしたのか。

ナショナリズムの台頭と日本としての教育の独自性が強調されるにしたがって、良妻賢母主義の女子教育論が女子教育界に主流になった。ここで本論文の問題意識に戻ると、実践女学校と女子英学塾の創設者下田歌子と津田梅子、二人の女教育者は、と明治政府の「距離」はどのようなものか。どちらが当時の主流になるのかということ、明治三十年代前期の女子教育状況についていえば、言うまでもなく、国家主義的な教育の強化である。日清戦争によって、後進国

49) 田中彰『岩倉使節団「米欧回覧実記」』岩波書店、2002年、19頁。

たる日本の勝利となり、日本が清に勝つことができたのは、国民忠君愛国の精神によるものであったので、その精神をますます高め、列強の侵略主義に対し準備しなけりばならなかつた。教育においても、いよいよ教育勅語の趣旨の奉体を重んじ、国家主義的色彩が濃くなつていったが、このことは、また女子教育における伝統主義の復活を導いた。つまり、良妻賢母主義は国家主義教育観として提唱された。それによると、良妻賢母を中心とする女子教育思想を持つ歌子は時代の流れに沿つて活躍したとも言える。一方、伊藤博文自身は、国の教育政策を構築し、推進するにあたり、歌子を大いに利用したところがあると言えるだろう。美子皇后の歌子に対する信任は厚く、その意味で伊藤にとって、歌子は皇后陛下が女子教育についてどう考えておられるかを知る貴重な情報源である。歌子の方にも、理想実現のためには学校教育に関する法整備や制度設計のみならず、現実に莫大な資金や土地の払い下げが必要であり、伊藤の力を借りたいというしたたかな計算があつただろう。

ここからはっきりわかることは、明治32年に創設された実践女学校と明治33年に創設された女子英学塾は、同じ私立学校でありながら、違う道を歩んでた。国家本位を特徴とし、良妻賢母の代表として下田歌子の女子教育思想は、当時の国民教育を目標にした。それによつて、女学校の創設や発展もより順調である一方、「良妻賢母」理念を捨て個人本位を特徴として、英語教学を基本方針とする女子英学塾は、校地や資金などが欠けており、創設者の情熱だけで無謀なことと心配されたが、身近な人々の支えがあり、例えば、父津田仙、アリス・バーコン、大山捨松、伊藤博文、桜井彦一郎、鈴木歌子、トマスらの協力を得て、大きな進展を遂げることができた⁵⁰⁾。それはまさに梅子がそうした時流を見抜く鋭い洞察力を持ち、時代の潮流に合つていたと言える。明治30年代から大正に進む過渡期ともいえ、実践女学校と女子英学塾は、どちらも為政者たちが日本の女子教育を模索する階段で手を打つたものでもあり、欧米の貴婦人と対峙できる日本女性の育成を目指したものでもある。明治30年代から大正に進む過渡期ともいえる近代日本女子教育史に、欧米の貴婦人と対峙できる日本女性の育成するため、明治政府や皇室は大きな力を添えた。それより、むしろ主導し促進したといつても過言ではない。実践女学校と女子英学塾はその一例である。

おわりに

女子教育を論ずるに当たつては、まず時代背景はつきり捉えなければならない。明治初中期における日本の教育はどのような状況であつたのか。学制の発布以来、女子教育は徐々に真剣に考えることになつた。構想が大きかつたが、やはり女子教育は非常に遅れてた、その改革実施は大きな困難に当つた。筆者は明治初中期には明治政府の教育方針をキーワードとして

50) 前掲注1)、20頁。

考察した。二人学園や塾を創る前での教育環境を論じた。そして二人は教育の道を歩み始め、のち自分らしく学校を創設までの過程を明らかにした。二人が学園や塾を創る前での教育環境を論じた。そして二人は教育の道を歩み始め、のち自分らしく学校を創設までの過程を明らかにした。それに、明治という時代に、そういう改革や進歩を促進する強力なのは間違いなく明治政府ということである。政府の法令や制度の指示に従って、教育者であり歌子、梅子の活躍であることが分かった。

実践女学校と女子英学塾の創設の過程で、下田歌子と津田梅子各自は、明治政府や皇室との関係は密接であると思われた。また、本論文の問題意識を重点として明らかにした。つまり、女子教育者と明治国家の関係について論じた。実践女学校と女子英学塾の創設者歌子と梅子、二人の女教育者は、明治政府との「距離」はどのようなものか、どちらが当時の主流になるのかというと、答えは前者である。良妻賢母を中心とする実践女学校のほうが当時の政府の意志に近く、つまり、明治国家との「距離」がより近いということを究明した。